ソフトウェアとコンテンツ
Software and Contents

ベンカテッシュ・ラガワン†
Venkatesh Raghavan†

私が 2007 Free & Open Software for Geospatial(FOSS4G) Conference(Victoria Canada, September 24 to 27, 2007)に参加したのは、2007 年秋のことであった。

大学院創造都市研究科が2003年度に開学してから、5年目のことである。カナダ出張の手土産として、大会ロゴ入りのTシャツを北先生に差し上げた。

先生の研究室でコーヒーをいただき、机の上のTシャツを脇に、オープンソフトウェアについてひときわ話が弾んだ。その頃、世界はフラット化して、グローバル化してボーダレス世界が現れる、という雰囲気があった(“The World Is Flat: A Brief History of the Twenty-first Century”by Thomas L. Friedman, 2005)。

しかし、フラット化した世界は曲がりくねっていて危険がいっぱいの世界であった。

北先生は、「これからは、ソフトウェアだけでなく、コンテンツもフリーへ向かうんです。」といったようなお話をされ、Creative Commonsの話題で盛り上がった(“Code and Other Laws of Cyberspace”by Lawrence Lessing, c1999[1])。

夕刻になると、北先生は「ちょっと行きましょうか」と帰り支度を進められる。二人だけのワークショップの第二セッションの始まりである。

世界に著名な「とりあえずビール」で乾杯の後、すぐに先ほどの話題が続く。酒量が進み、酩酊した英語と日本語が交錯する。もどかしくなり、机の上で図表やキーワードをメモ用紙に殴り書きしながら焼酎が消えていく。互いに大論文のシーズを発見したかの満足感が満ちていく。朝には落書きのゴミ山なのだが….

それはさておき、アップルストアから始まったプラットホームによる囲い込みは、急速に分割された帝国世界を出現させた(“The Four: The Hidden DNA of Amazon, Apple, Facebook and Google” by Scott Gallowway, 2018)。

また IBM 社のワトソンから始まった第 3 次 AI ブームは、2040 年シンギュラリティ論などの俗説が流布している(新井紀子『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』, 2018)。

しかし、私にとって最も懐かしい北先生との日々は、Daniel J. Boorstin, Alberto Manguel, Umberrto Eco, Peter Burke などを巡る「知」の巡礼であった。

大学院創造都市研究科は、2003 年 4 月に始まり、2018 年度には募集停止をした。

北先生は、2013 年 3 月に退官され、大阪市立大学名誉教授の称号を受けられ、私学に転出された。今も時々、お会いいただいている。

古希記念、誠におめでとうございます。

［受理：2018 年 9 月 12 日］

† 大阪市立大学大学院工学研究科

[1] 日本では、第二版が邦訳されている。ローレンス・レッシング『Code Ver.2』, 2007.